

無職の独身の子を持つ高齢者世帯へのアウトリーチ

－親子関係の変化に着目して－

○ 龍谷大学大学院 社会学研究科 博士後期課程 淡路 和孝 (5412)

栗田 修司 (龍谷大学・976)

キーワード3つ: アウトリーチ・ひきこもり・親子関係

1. 研究目的

無職の独身の子を持つ高齢者世帯（以下、「親子世帯」とする。）は、昨今「8050問題」とも言われ社会的課題となっている。これらの世帯は、親の介護や子のひきこもりなど複合的な生活課題を有し、社会から孤立している可能性があり、訪問等によるアウトリーチが効果的である。

だが、文献レビューより「親子世帯」に関するアウトリーチに関する研究について、必ずしも十分でないことが明らかとなっている（淡路 2018: 60-61）。

本研究では、「親子世帯」のアウトリーチのプロセスを明らかにする目的で、主に親を支援する地域包括支援センターの社会福祉士を対象にインタビュー調査をおこない、アウトリーチを必要とする「親子世帯」の特徴、それらに対するアウトリーチの実際、その結果「親子世帯」はどのように変化したのかを研究したところ、若干の知見を得たので報告する。

2. 研究の視点および方法

地域包括支援センターに在籍し、資格取得後3年以上かつ現在の職場に1年以上所属する社会福祉士（計5名）に対してインタビュー調査（2019年1月21日～2月16日）を実施した。インタビュー内容としては、基本属性（社会福祉士としての経験年数、現職として従事した勤務年数、法人種別、所属する相談機関と地域との連携）、高齢の親と無職の子に関する事例を支援するにあたっての現状と課題、高齢の親と無職の子からなる世帯に対するアウトリーチについて、自身の所属している相談機関そして社会福祉士として果たすべき役割である。

なお、親は65歳以上、子については、満20歳以上とし、親子ともに障がいの有無や、各種医療保健福祉サービス利用の有無は問わない。また「世帯」とは、これらの親子が同居している世帯を指す。「無職」とは、支援開始時より、就学や職業訓練を除き、労働（障がい福祉サービスにおける就労支援サービスは除く）していない期間が6か月以上経過し、かつ求職活動をおこなっていない状態と定義した。

分析方法として、録音データから逐語録を作成の上、定性的コーディングをおこない、事例-コードマトリックス表を作成したうえでコードを確定した（佐藤 2008: 33-73）。次に、研究目的に沿い、メインカテゴリーを【アウトリーチを必要と判断した「親子世帯」の特徴】、【「親子世帯」に対するアウトリーチの実際】、【アウトリーチを通じての「親子世帯」の変化】と定め、コードをメインカテゴリーにそれぞれ振り分け、振り分けたコードをさ

らにサブカテゴリーに分類した。

### 3. 倫理的配慮

調査への参加は自由意志であり、辞退に対して不利益を被ることは一切ないこと。個人やその関係者が特定される情報は一切収集しないこと。また、インタビューの回答は拒否できること。調査結果について学会発表を含む公表をおこなうこと。これらを書面にて説明し、所属長およびインタビュー対象者の署名により調査の同意を得た。なお、龍谷大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」（申請番号 2018-21）の承認を得て実施した。

### 4. 研究結果

コードは27つ抽出され、①【アウトリーチを必要と判断した「親子世帯」の特徴】は8つ、②【「親子世帯」に対するアウトリーチの実際】は11つ、③【アウトリーチを通じての「親子世帯」の変化】は8つに分類された。

①のサブカテゴリーとして、「親子世帯」の生活困難のプロセスに着目し、〈親子関係が変化する〉、〈親子の日常生活に困難が生じる〉、〈親子とも孤立する〉、〈親子ともに困りごとを言わない〉の4つのサブカテゴリーに分類した。

②のサブカテゴリーとして、アウトリーチを実践するうえで必要な情報収集と、「親子世帯」に対するアプローチの実際に着目し、〈関係者から事前の情報を集める〉、〈集めた情報を分析する〉、〈様々な方法で親子にアプローチする〉の3つのサブカテゴリーに分類した。

③のサブカテゴリーとして、アウトリーチによる「親子世帯」への介入のプロセスに着目し、〈親へアプローチする〉、〈子へアプローチする〉、〈「親子世帯」の状況が改善する〉、〈親子関係が肯定的に変化する〉、〈親子が安心して生活できる〉の5つのサブカテゴリーに分類した。

### 5. 考察

地域包括支援センターは、相談機関の特性上、関係者から相談が入り、まず高齢の親への生活の改善を図ることを目的としている。

しかしながら、「親子世帯」に対するアウトリーチを重視する意義は、親の生活状況の改善だけでなく、子が社会福祉士を信頼するプロセスを通じ、親に対しても前向きな反応が生まれ、最終的に親子関係が肯定的に変化していくことである。

今後の課題として、子にも何らかの専門的な支援が必要と感じているが、インタビューを通じて子を支援する相談機関との認識の相違を感じるという結果もあったことから、主に子を支援する機関のアウトリーチの特徴を明らかにすることで、本調査との比較をおこなうことが必要である。

### 文献

- ・淡路 和孝 (2018) 「文献レビューからみるアウトリーチの構成要素」『龍谷大学大学院社会学研究科研究紀要』 pp. 60-61
- ・佐藤 郁哉 (2008) 『質的データ分析法』 新曜社 pp. 33-73